

菊慈童

# 菊慈童

円地文子

新潮社版



菊<sup>きく</sup> 慈<sup>じ</sup> 童<sup>どう</sup>

昭和五十九年六月十五日 発行  
昭和六十年十一月十日 十三刷

著 者 円<sup>えん</sup> 地<sup>ち</sup> 文<sup>ぶん</sup> 子<sup>こ</sup>

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式 会社 新 潮 社

郵便番号

東京都新宿区矢来町七十一 一六二

電話 業務(03)二六六―五二二

編集(03)二六六―五四一

振替 東京 四一八〇八

定価一五〇〇円

印刷 二光印刷株式会社・製本 大口製本株式会社

© Fumiko Enchi 1984, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-303408-4 C0093

菊  
慈  
童



八十四歳の老婆が家出した。

正確に言えば家出ではない。転居なのである。元の自分の家から、二、三百メートル離れた親戚の貸家に移っただけのことなのであるが、この経緯を辿って行くと、養女夫婦に家を追い出されたとしか言いようがない。田之内せきというその老女は、五十数年前に、まだ畠や藪の多かった東京府下のこの土地に、切りつめた予算で家を建て、気難しい姑を見送り、夫は二十数年前に長煩いの末、この家を彼女に残して亡くなった。養女が勤めさきで知りあった男と結婚し、姓は変ったが、先方でせきの家に住むことを希望するので一緒に住んで、更に二十年近い月日が流れたのである。

せきは自分の生活は切りつめるが、親類縁者から他人の世話までよく見るので、近所隣りでも評判の賢夫人だった。

養女の夫はせきの氣に入る性質ではなかったが、夫婦仲はよく、二人の孫が生れて無事に成長して行つた。せきは娘を愛したように、二人の孫も愛した。せきの夫は中級の公務員だったので、せきは遺族扶助料と多年の貯蓄とで、自分一人の生活には、事欠かなかった。子供のころから習つてかなりな上達を見せていた謡曲を習い直して、時々温習会に出るようになり、他所目にはまことに事足りた晩年を送っているように見えた。そのせきが八十歳を四つも越えた年齢になつて、眼も白内障の手術をして視野が狭くなつてきているというのに、自分が夫と共に……というよりせきの夫は、大酒家の、好人物であつたから、家を建てたり多少の蓄財も出来たのはせきの才覚の結果と見てよかつた……終の栖と定めて五十余年住み慣れた家を、何で出て行かなければならなかつたのだろう。

あれは間違いなく養女夫婦に追い出されたのだ。

この報らせはせき一家の懇意な人々の耳に異常な衝撃を与えて形をなさない雲のようにひろがつて行つた。老人福祉は昔に比べれば、格別に進んで来ていると言われている現在でも、一つ屋根の下に住む家族の間では、老人、中年夫婦、青少年と入りまじつたそれぞれのドラマが演じられている。中でも実生活に必要ななくなつた老人をどう扱うかは、青少年の問題に優るとも劣らず、中年の家族にとつて、厄介な事実である。

子供には手がかかるといつても、前途がある。一年でも二年でも、経てば経つほど、親の手から離れて行くが、老年の場合はその反対で、だんだん足腰も不自由になり、頭の働きも鈍くなつて、大きな赤ん坊に戻つて行くのが普通である。勿論、例外はある。若い者そのものの、精神も肉体も、矍鑠としてゐる老人はあるが、それが大部分と思うと大間違ひである。

戦前までは、裏側はともあれ、表で向きは老人は尊敬すべきものとされてゐた。

これは「父母に孝に兄弟に友に」の教育勅語精神が日本人の頭によくも悪くも幼いときから叩き込まれていたせいで、敗戦後、この精神は進駐軍の持込んだアメリカイズムと、日教組の努力によつて、日本人の内から消えて行つた。家族も核家族となつて夫婦と子供が単位になつた。しかし現実はその簡単には行かない。戦前、明治大正期から生きて来た、両親や祖父母の時代があり、彼らが一緒に住む以上、家族は欧米人の考えるような核の単位にはなかなか成りきれないのである。老人たちと嫁であり息子である中年の間に行き違いが起つて、嫁の立場からは大きな古道具のような高年者が邪魔になるのは当然である。

そうだからといって、嘗つては一家の中心であつた老人達を邪魔にして、敝履へいりのように投げ出すわけには行かない。お互いが相手を庇つたり、突きのけたりしながら、一つ屋根の下に暮しているのが、いまの大部分の家族の生態であらう。

一方を悪いと極めつけることは出来ない。さればといつて、アリアン民族風の個人主義に日本人が徹底出来るかと言え、首を傾けずにはいられない。日本には昔から義理人情という言葉がある……言葉だけでなく、この言葉に裏づけられている内容は日本の庶民の間に現在でも生きているのである。歌舞伎や浄瑠璃の世界は絵空事に受けとられても、浪花節の流れを棹さしして来た演歌はなぐりかけるような、訴えかけるような節まわしを通して、結構、現代の民衆の中に情緒として生きている。民衆は一定の条件……例えば物質的な逼迫とかひどい圧政とか……の他は保守的なものだということを知らなければならない。

それならば、八十四歳の老女の心ならぬ転居……家出について同情するかと言えばそれはまた、別の話である。そこまでこじれるには、母親の方にも片意地なところがあるに違いない。「まあ、どっちもどっちだ」と世間のものは冷く言う。

ここまで書いて来たとき、香月<sup>こうづき</sup>滋乃は、ノートのペンを置いた。滋乃自身、せきよりは十歳近く若い、既に七十を過ぎた老女である。

「何て、つまらないことをこつこつ書いているんだろう」

と滋乃はつぶやいた。

鬱憤<sup>うつげん</sup>晴らしなのだ。おせきさんのことを言ってるんじゃない。これは私のことを言っているんだ。他人<sup>ひと</sup>事<sup>こと</sup>ではない。

滋乃は年こそ若い、八十四歳のせきよりも、遙かに衰えた肉体の持主である。四、五年前に、質のわるい眼病を煩って手術で辛うじて失明は免れたものの、〇・〇一ぐらいの視力しか無く、その上、若い時煩った結核性骨膜炎の後遺症がこの数年ひどくなって、立居が覚束なくなっている。それでも滋乃は屋内に閉じこもっては居ず、結構、衣類に気をつかつて出歩いている。

他には何一つ取柄のない女だけれども、読み書きは子供の時から好きで、結局それが小説を書く職業に因<sup>よ</sup>つて、一応作家として一生を送ることになった。振りかえって見ればいろいろなことがあったにしても世間的に見れば、成功者に違いない。しかし、滋乃は、自分の一生で革命を起したことは一度もなかった。せめて離婚ぐらいはやつてのけたかったが、気の合わない相手であったのに、とうとう実行出来ずに四十年も一緒に暮してしまった。数年前に相手が亡くなって、独身<sup>ひとりみ</sup>になったが、一人娘とは結婚してから一つ家に住つて、結局は、孫の面倒も見ようになつた。

ところが、成長するに従つて彼らはいつこう、祖母を尊敬しない。外では、一応名の知られた

お祖母さんで物質的にも、世話になつてゐるのだが、娘がそれを当然の権利だと思つてゐるやうに孫も祖母の存在を殆ど無視してゐる。滋乃はそのことを不快に思つてゐるが、それでも、彼女の行動が、氣にならぬというわけには行かない。二十歳になつたばかりの孫娘が自動車の免許証を取つて、乗りまわしはじめると、もしや、事故を起しはせぬか、自分が怪我をするか、人でも轢いたら一大事だと、夜半の寝ざめにも氣になり出すと眠りつけないことが始終である。何でこの氣が弱くなつたものか、やっぱり年<sup>とし</sup>齡のせいだろうと思ふほど、生きてゐることが鬱陶しく、面倒になつて、苦しまないで、楽に死ぬ法があつたら、教えて貰いたいと思う。

こんな滋乃には田之内せきの転居事件はまことに頃合ひの刺激であつた。

頼まれ原稿以外に、殆どペンを取つたことのない滋乃が「よしなし草」と表紙に書いてあるノートに前のような抗議とも愚痴とも言える文章を書き出したのもそのせいである。しかしこの老女にはせきと違つて現実をもう一つ自分のうちで鋳溶かして、別のものにしてやろうという山氣というか、芝居氣というか次元の違う欲求があつた。作家氣質と言へばそうも言えるが、油断のならないと言へば油断のならぬ、化猫のような女である。

その時、滋乃の書齋の戸を開けて、

「先生、こういう方がお眼にかかりたいといつて、お玄関に来てゐるんですけど」

と秘書の梅本きつ子が名刺を出しながら言つた。

「あら、お約束の方じゃないんですよ」

滋乃は、知りあひの編集者ででもなければ、紹介なしには逢わないのが普通であつた。勿体ぶる氣質ではないが、ほんとうに面倒なのである。きつ子もそれを知つてゐるので、前約のない未知の来訪者は取次がないのが習慣になつてゐる。

「『K・R』ペットショップの木崎さんでひと？　じゃ、誰れかうちのものが頼んだのかしらん」

「分りませんわ。智子ちゃんが犬を欲しいって言っていたから、その関係かも知れませんか」

「犬は私好きじゃないんだけど……」

滋乃は愚痴のような調子で言って、

「まあ、いいわ、玄関で会うから」

と言いながら立上った。

玄関には、瘦型な若い男が立っていた。

「香月先生でいらっしやいますか。私は『K・R』ペットショップの木崎と申します。実はお宅のお孫さんでしょうか。G学園の高校にいらっしやるお嬢さまが、日本犬を飼いたいからという御注文で、私どもには芝犬と、紀州犬は心当りがありますのですが、十月を過ぎると三月までは小犬をお売りする時期でありませんし、御予約もかなりありますので、先生の御承諾があれば、そのつもりにして置くつもりなんです。何分この頃はペットブームでよく出ますので」

男はまことに滑らかな口調で喋り立てている。滋乃はまず自分に無断で動物の売買を業者に頼んだという孫娘の僭越な行為が氣に障ったが、一概に、断つてしまふ氣にもならなかった。

「そうですか、私はまだその話をきいていないので、何とも言えませんけれど、来年の三月というんならまだ少しは待てるんですよ」

「ええ、それはなるべくお早い方がいい犬がお手に入ると思いますが、一週間や十日ぐらいはどうでもなりますから」

「じゃあうちのものと相談して、返事をさせます。電話はこの名刺のところですよしのね」

「はい、左様です。もし、見にお出かけのようでしたら、私が居ませんでも、店のものが御案内

しますから……」

男は、慇懃いんきんに挨拶して外へ出ていった。

「先生犬を飼うおつもり……」

男の影が見えなくなるとすぐきつ子が滋乃に言った。

「犬って、手がかかりますよ」

滋乃は書斎に行かず、居間に帰って来て長椅子に腰をおろしたが、きつ子は追いかけるように従いて来て、背後から話しかけた。

「毎日散歩させなきゃならないし、注射もさせるし、……智子さんがひとりで世話出来る筈ないじゃありませんか」

「そうよ」

と滋乃は落ちついて言った。

「私もそう思うわ。動物は飼うとなれば結構、手間のかかるものよ、猫より犬の方が外に置けるだけいいけど……」

「先生は犬猫を飼うの、もうもう厭いとだっておっしゃってたじゃありませんか」

「そうよ。自分から飼おうなんて思ったことは一度もないけど、ひょんなことで飼うようになつてしまうのね」

「はじめに、やめなければ駄目ですよ。飼ってしまえば結局、可愛くなってしまうんですから……」

きつ子は犬が好きで、つい一、二年前まで十四、五年も犬を飼っていたのを滋乃は知っている。その犬の死んだときには、きつ子は子供を喪ったぐらいがっかりして、ここの家へ来ても、時々

用の手につかないほどだった。

好きだから、他人の家にしても動物を飼われるのが厭なのだろう。溺れることの怖さをきつ子  
はよく知っているのだ、と滋乃は思った。

「私も、もう猫では懲りているから、つい一月ぐらい前まで、もう死ぬまで動物は飼うまいと定  
めていたのよ、ところがね。この間、小犬と中犬の間ぐらいの犬がうちの庭へ入って来たでしよ  
う。あの時ね……」

「ああ、覚えてます。あの犬、人馴れしましたねえ。ちよつと構ってやったら、尻尾しっぽを振って、  
じゃれついて来たでしょ。私もつい、キャベツ巻きの残りをやったら、先生、そんなことをする  
と居ついでしまうって、怖がつていらしたじゃありませんか」

きつ子は少々無念そうに言った。その時の滋乃のいかにも冷淡らしい態度が面白くなかったの  
である。

「あの犬は飼犬だったのよ。あんなに馴れて食べものまで食べて行つた癖に、あれつきり、一度  
も来ないじゃないの」

滋乃はきつ子の言葉を押し返すように言った。

実はその日のあと、滋乃は庭へ出る度にあの茶っぱい毛並みの素ばしつこい犬の姿を追求め  
ていたのである。

猫は貴族的で、犬は庶民だ。愛されようとして馴れ寄つて来る犬よりも、自分の欲以外に眼も  
くれない猫の貴族的な傲慢さを自分は愛すのだと豪語しつづけて来た滋乃であったが、この数年  
来心身の衰えて来るにつれて、他に愛を求める思いが深くなり、現実には彼女の求めるのと、反比  
例していよいよ寒々とひもじく彼女を取巻くようになった。

「伏姫の犬にてもあれまことあらば身を委せんとするひととき……って歌が柳原白蓮にあるでしょう。あなた知っている？」

「ええ、知ってます」

昔、文学少女だった一時代を持つきつ子が打てば響くように答えた。それだけ聞けば、きつ子には滋乃のペットショップの店員を一概に追返さなかったわけが呑みこめるのである。

先生はあんなことを言っている、この頃自分が家族から疎外されているのが居たたまれないほど淋しいのだ。いくら、田之内のお婆さんの家出事件に憤慨して見たり、それをなげいたりして見ても、それで自分の淋しさが慰められるものではない。どんなに可愛がっても、美しげで冷たい反応しか示さない猫よりも、向うから愛されたい、愛されたいと馴れ寄って来る犬に自分の孤独を慰めて貰いたいのだときつ子は理解したが、表面そんな顔はしないで、

「手がかかりますよオ。後で後悔なさらないように余っぽど気をつけることですね。智子さん達は犬より好きなものが、そのうちに出来るからいいけど、犬を飼って、婆あぬきのおふくろになるのは結局先生ですよ」

「私は何も出来ないから、おふくろは梅本さん、結局あんだわね」

「厭なこつてすよ」

きつ子は叩き返すように言った。こんな東京者特有の荒っぽいやりとりが、かえって滋乃に活気づけることをきつ子は微妙に知っていた。

「犬はまあどっちにしても、半年先きのことだからいいとして、今日の晩御飯何になったの……登美子はどうせないんでしょう」

「ええ、お芝居へお出かけで、その前に、銀座の銀鈴画廊で、泉亭修二さんいずみでいの個展があるから見

て行くつて、言つておいででした」

「泉亭さんてこの頃、銀鈴画廊の由比珠江がさかんに売出してゐる画家でしょう。由比夫人があんまり讚めるから私も一度見に行こうかとも思うけれど、私は画商つてものが好かないんでね。何だかイカサマつて気がするのよ」

「でも由比さんは本来の画商ではないでしょう。もともと大金持ちのお嬢さんでお父さんがコレクターだったんで、自然に眼が肥えて玄人になった、……つまり、ジレッタント上りですわね」  
「そりやそうよ。あの人はだから好きな絵かきに画廊を貸すだけで、本当の商人じゃないつて、いつも言つてゐるじゃないの」

「だからいいじゃありませんか」

「それがまた困るのよ」

と滋乃は大袈裟に眉をしわめて見せた。

「玄人なら、玄人に徹底してゐる方がいいの。素人でもなし、玄人でもなし、それでいて自分だけは世界中で一番絵が分るつて顔してゐるの、一番始末が悪い」

「そうですか。でも先生は結構あの方、好きじゃありませんか。話していらいしやる時きいてると、分りますよ。阿吽の呼吸が実によく合うんだな。ということは先生も由比さんと同じ」

「分つた、分つた、その先きは聞かないでも分つてゐるわ。お嬢さん崩れで、いくつになつてもお尻に尻尾が残つてゐる……つまり半素半玄だと言いたいんでしょ」

「お手の筋というところですね。まあ、先生はお書きになるものは玄人ですよ」

「玄人じゃないよ」

と滋乃はぶつた切るように言つた。

「どうしてこういくつになっても、手が極らないものかと呆れているわよ。由比さんの絵画鑑賞の方が少しは増しかも知れない」

この人はまあよく、性懲もなく……自分の仕事に自信を持つことが出来ないのだろう。夜郎自大でどつかり居居つていないところは取柄でもあるが、不惑どころではない。己れの思うところを行つて矩を超えずという年齢になつていながら、褒められれば子供同様に喜ぶし、貶なされれば、結構本気になつて腹を立てる……天真爛漫とでも褒めてやりたいけれども、相手になるもの身も考えて貰いたいときつ子は思った。

「でも先生は惚れっぽいから、その泉亭修二の絵にも一眼でまいるかも知れない」

「いや、まいらない。この頃、大抵のものを見てもまいらなくなつてしまつた……自分の眼に自信が出来たというよりも、他人のしていることなんぞどうでもいいやという氣になつたのよ」

「そう、その割には悪口は衰えませんね」

「そうよ。鬼爺てのは無いけど、鬼婆はさらにあるじゃないの」

「さて、鬼婆よりも、飯炊の方がさきですね。メーン・ディツシュ何にしましょう」

「そうね」

滋乃は急に眼を輝かして言つた。肉を食べようか、魚にしようか、それともさらりと鳥の水炊きにでもしようか。胃の丈夫な滋乃は小さく痩せこけている癖に食欲だけは、屈強の男に大して負けをとらないほど旺盛である。

「食物の入らなくなつた時は、死ぬ時だわ」

と普段けろけろと言つてゐる。この人を釣るのには食物が一番効果があるときつ子も納得していた。食物好きといつても大して難しい好みがあるのでもない。何分大学高校の孫が四人もいて、

夜ともなれば総勢七人の家族が食卓に集つて来るわけであるから、青少年男女それぞれ食物の好みがあつて、なかなか一色に統一することは出来ない。あつちでは焼き肉がよいといえば、こつちでは舌鰯しちぢめのソテーが食べたいという。家政婦の小野は料理好きなので面倒がらずに、手早く片づけて一応一同の好みに合せたものを作ってくれる。

「小野さん、てんぷらは厭だなあ」とか、

「私塩鮭がいい」

とか子供たちの注文は色々である。

「あのね、今日はいい真魚まな鰹が出ていましたよ。先生にはあれを焼いてもらいましょうか」

「そうね。私は真魚鰹の味噌漬大好きだから焼いてね。ほかにすり芋でもあれば結構だわ」

「すり芋は山かけでなくっていいんですか」

「山かけは今日は欲しくないの。何ならとろろでもいいのよ」

「じゃあ、とろろにしましょう。お子さんたちでも、智子さんはとろろ好きなんですよ」

「そう、それでいいわ。それに昨日京都から届いた千枚漬をたつぷり切つて頂戴」

「はい、はい、あの鶴の羽みたいに丸くして真中に唐がらしを鶴の鶏冠とさかのようにちよいと置くのね。あれは私もお宅で憶えたけど、綺麗でいいですわ。京都らしく優雅ですよ」

教えてくれた京都の人は優雅だったけど……うちでやると、食べる方が食べる方だから、優雅なんか吹つとばしてしまう。

滋乃はにこにこ笑つて、

「まあ、小野さんの来る間のことだわ。うちの孫たちなんて、食卓の味わいなんてまるで分りは